

しては心強いかぎりです。) 第一次があるから第二次があるのかということに関しては何とも言えませんが、今回のチェルノブイリ派遣が必ずや意義のあるものとなるよう全力を傾注したいと思っています。そのためにも調査団を派遣するための現実的な問題、財政問題をまずクリアしなければなりません。

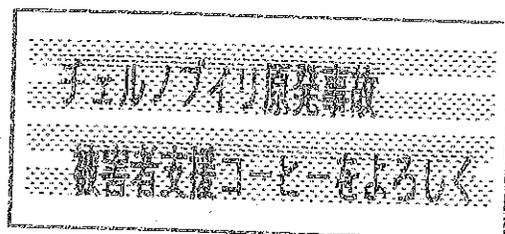


渡航費用(滞在費を含む)だけで一人40万円程かかるので、5人で200万円となります。私を含めた3人は個人々人で工面するというのが原則になっていますので、それぞれ頑張ってもらおうとして、今回も支援物資と一緒に持っていきたいと思いますので、400万円を目標にしたいと思います。もちろん現品支給も含まれます。

今回持っていくものは、放射能測定器2台、FAX2台、心電計2台、注射器やビタミン剤、胃腸薬、粉ミルクやスキムミルク、軽食品などです。また、前回送れなかったおもちゃ類も一緒に持っていきます。おもちゃ類はすでに必要分そろっていますので、今回あらためて呼び掛けることはしませんが、「折紙」とか「折り鶴」、子供たちへのメッセージなどはどしどし送ってください。今回は直接手渡しますので、私たちの思いをより確実に伝えることが出来ると思います。

尚、三共株式会社からビタミン剤と胃腸薬、テルモからは注射器などを現品支

給としていただいております。その他、知り合いの農家、あるいは農協などから安く米を仕入れることが出来るという人はご連絡ください。ある程度まとまれば支援物資として持っていきたいと思います。注射器がかなりかさばりますので他の物資をどの程度持っていけるか確認できていませんが、できるだけたくさん持っていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。



遠賀郡水巻町の有機農産物産直センターが製造販売元になって、「チェルノブイリ原発事故被害者支援COFFEE」ができました。

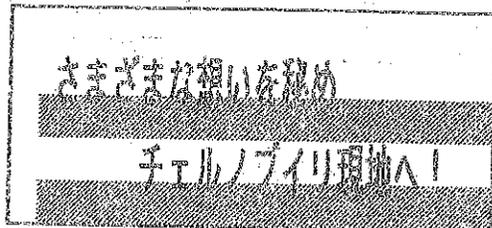
このコーヒーは、バルー・アンデス山脈の標高が高いところで農薬と化学肥料を一切使用せずに栽培されたもので、カフェインの含有量が一般に市販されているコーヒーの半分以下になっています。値段は、一袋200袋で700円です。

このコーヒーの売り上げの一部は、チェルノブイリ原発事故によって苦しみを強いられている人たちの支援のために「支援運動・九州」を通して活用されることになっています。

そこで、この支援コーヒーを2100袋程売って、取りあえず今回の派遣費用の一部に当てたいと思っています。金額にして約50万円程が支援運動の方に入ってくることになっています。これまでの募金の集まりぐあいからすると、コー

ヒーを完売できれば何とかチェルノブイリまで行って、帰ってこれそうです。

よろしくお願ひします。購入希望の方は事務局まで連絡ください。できるだけまとめて買っていただくと助かります。



いつかはチェルノブイリの現地に行くのかもしれないという漠然としたものはあったような気がしますが、それが現実のものとして見えてくると何とも複雑な心境です。本来なら、現地へ行くことの意味をしっかりと確認したいのですが、現実の雑務はそんな感傷に浸っている時間を与えてくれません。

美浜原発事故の対応に追われてしまい、医療調査団派遣の準備が遅れに遅れ、ソ連とのやりとりも4月に入ってからのというギリギリの状況でした。といっても普通の観光ビザではモスクワ周辺しか入ることが出来ず、共和国の中に入り、市民グループとの交流や病院や学校などの施設を訪問しようと思えば、その共和国の適当な団体が私たちを招待するという形を取らなくてはなりません。しかしながら白ロシアには何のあてもなく、まず私たちを受け入れてくれる団体を探るところから始めなくてはなりません。なかなか思うように事が進まず、1週間、2週間と無常にも時間だけが過ぎていく、そんな日々が続きました。一緒に行ってもらっている伊勢さんに「6月に行くことにしていますから準備をしてい

てください」と言っていた手前、時期をずらすことも出来ません。いろいろ手を尽くしてようやく昨日(5月15日)、白ロシアから受け入れをしても良いという返事がきました。ビザ発行の手続きにギリギリ間に合うという、きわどいタイミングです。ウクライナの方は、ピースニック新聞社が受け入れをしてくれることになっていきますので、これでようやく旅の行程が決まりました。

◆ ◆
6月13日、成田発12時のアエロフロート584便でモスクワへ向います。モスクワにてアエロフロート1767便に乗り換え、同日午後10時15分(現地時間)キエフ到着。

14日、ジトミール市へ移動。ピースニック新聞社と懇談。市内の病院などを訪問。

15日、ナロヂチを訪問。入れないときは周辺の村々を訪問。

16日、キエフ市へ移動。子供病院や学校、保育所など訪問。

17日、チェルノブイリの子供たちなど市民グループやウクライナ科学アカデミーなどと交流。

18日、白ロシア共和国、ゴメリ市へ移動。病院を中心に訪問し、ホットパーティクルに関する情報の確認など。

19日、モギリョフ市へ移動。病院や保育所などを訪問。

20日、ミンスク市へ移動。受け入れ先の白ロシア平和基金と

懇談。小児血液病センターなどを訪問。

21日、チェルノブイリの子供たちチェルノブイリ同盟、などの市民グループと交流。

22日、モスクワへ、チェルノブイリの犠牲者の眠る墓地を訪問。17時40分、アエロフロート587便で東京へ

23日、午前9時15分、成田着。

医療調査団派遣、何をするのか

今回の調査団の目的は、最も緊急性を要する医療援助を効果的に行なうため、現地の医療の現状を調査し、私たちに出来る医療援助の道を探ることです。さらには日本とソ連との医療交流の道、例えば日本から定期的に現地の病院に診察、治療にいけるような、あるいはソ連の医者が日本の病院へ一定期間の間研修に来れるような、そんな交流の道が開ければと思っています。そのためにも日本の側の受け入れの体制や医療プロジェクト作りは現実的な問題として、呼び掛けを始めていく必要があります。

また、今回の訪問で様々な情報を自分たちなりに整理してきます。一つには現実の汚染状況です。放射能測定器を持っていますので、全ての訪問先でセシウムとストロンチウムの値を測定してきます。正確な汚染状況など計れる術もありませんが、ものすごい汚染地帯に居るといことは実感できると思います。また、そういうところで暮らしている人々、暮

らさざるをえない人々と直に接し、生の声を聞いてきます。そして、子供たちに実際どういう変化が起きているのか、どういう状況に置かれているのかこの目で確かめてきます。どこまで凝視できるか全く自信はありませんが、この目に焼き付いたまますを報告したいと思います。

各地でチェルノブイリ報告会を

帰国後、チェルノブイリ報告会を各地で開催したいと思います。全員が一緒に回るとするのは難しいので、それぞれ分担して行ないたいと思います。日程の調整等ありますので早めに準備の方をお願いします。基本的にはスライドを使っての報告会ということになります。スライドの作成に10日間程かかりますので、7月5日以降という事になりそうです。すでに北九州では7月8日、午後6時30分から大々的に報告会を取り組むことが決まっています。

またスライドの他に、報告集も作る予定です。内容の方はまだ確定していませんが、値段の方は700円ぐらいになりそうですというのが決まっています。不眠不休で作り上げる予定ですが、それでも一カ月ぐらいはかかりそうです。7月の終わりにはお届けすることが出来ると思いますので、支援運動2年目の会費と一緒にお申し込みください。

6月28日は恒例の九電株主總會の日ですが、この日に總會終了後、「チェルノブイリ支援運動・九州」の2年目の總會を開きたいと思います。時間等詳しいことについてはについては後日連絡しま

すが、議題は、①、支援運動の一年を振り返って、②、二年目の課題、③、組織と運営について、④、チェルノブイリ報告などの予定です。

遠方からの参加、大変だと思いますが支援運動をますます大きな運動にしていくなためにも、よろしくお願いします。

ジトミールスキー・ピースニック
編集長ヴァレリイ・ネチポレンコ氏
がやってきます。

ウクライナ共和国での支援運動の受け入れ窓口であり、今回私たちを受け入れてくれるジトミールスキー・ピースニック新聞社の編集長であるネチポレンコ氏が8月日本にやってきます。また、彼と一緒に小児科医師のアルチェフ・ライサ・ブラジミロブナ女史も来ることになっています。九州へは8月8日・9日入ることになっていますが、通訳の手配等は事務局で行ないますので、是非受け入れをしてみたいという所がありましたら至急連絡ください。早いもの勝ちの企画です。

医療調査団打ち合せ会議

時：6月2日（日）午後2時

所：真鶴会館（九州歯科大前）

●調査団派遣メンバーが全員集まり最終打ち合せを行ないます。調査行程・現地での活動・放射能測定器の扱い方・報告集作成・報告会日程等
●時間の都合のつく方は、是非ご参加下さい。

チェルノブイリの現状をこの目で確かめるため白ロシアに行ってきます

河野近子

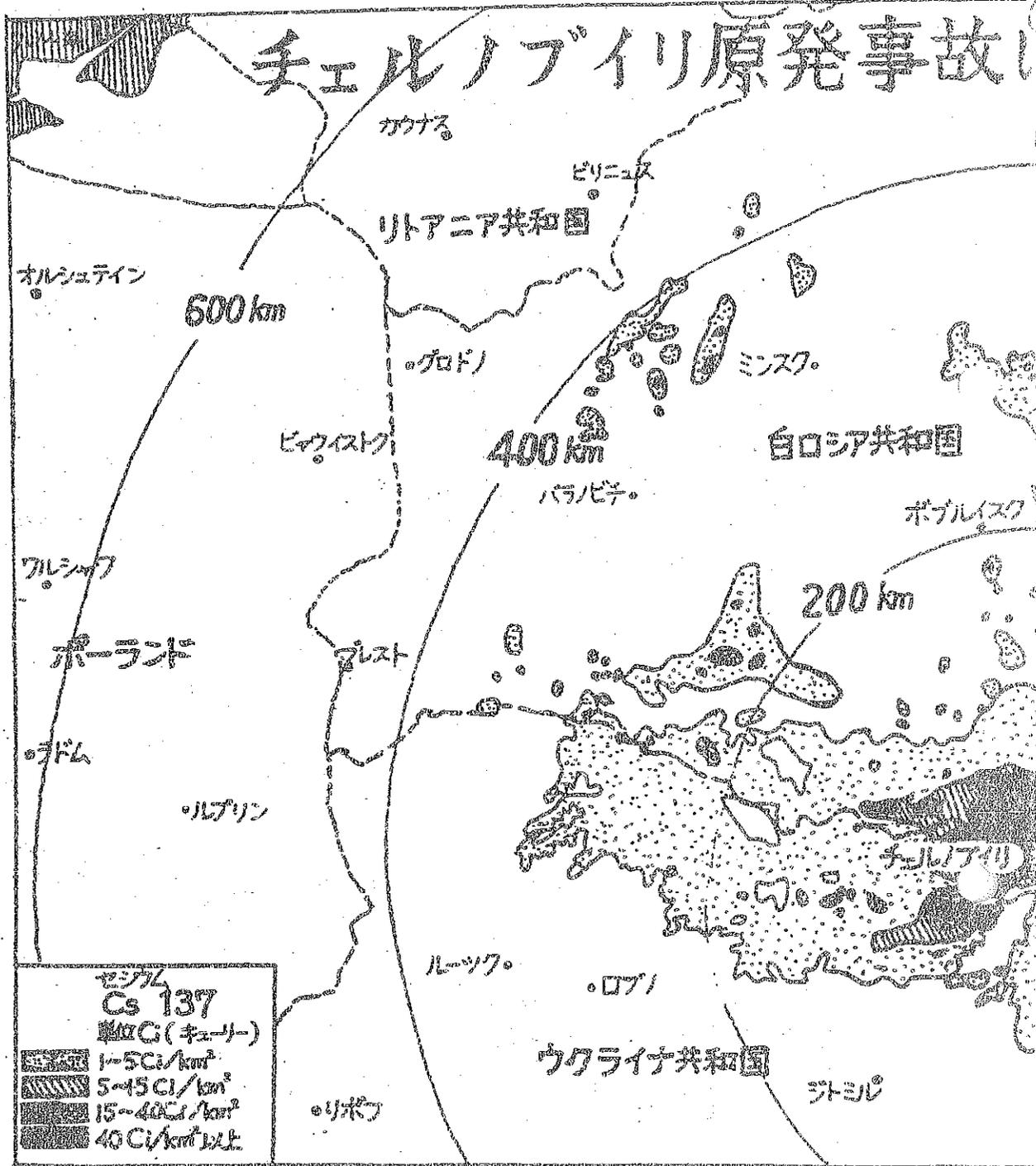
5年前の4月26日、以前から恐れられていた原子力発電所の重大事故が現実になってしまいました。ソ連・チェルノブイリ原子力発電所での核暴走による大爆発でした。

この大爆発により原子炉は原型をとどめないほどに激しく吹き飛び、原子炉の中に密閉されていた死の灰が、広島原爆の1500発分も（セシウムの場合）全世界にばらまかれてしまいました。その約70%が白ロシアに降り注ぎ、白ロシアの地は、その5分の1（4万平方Km）もの土地が激しい放射能で汚染されてしまいました。セシウムの場合には、300年もの間消えることなくその地を汚染し続けます。

その土地に住む500万人にもものぼる人々は、毎日毎日放射能まみれの土地に住み、放射能で汚れた食べ物を食べながら生活を続けています。本当はすぐにその土地を離れて、汚染の低いところに移住しなければならないのですが、それだけの人々を移住させるためには、莫大な土地と費用が必要なため、現実には不可能なことなのです。

食べ物から体内に入った放射能は、生体濃縮され人体の中に蓄積され続けます。体の外から内から放射能を浴び続けた人々のなかに（特に子供たちのなかに）、

チェルノブイリ原発事故



6月13日 成田ーキエフ, 14日 ジトミール市, 15日 ナロジチ 16日、17日 キエフ

ガンや白血病などの不治の病が増え続けているそうです。又、免疫力が低下し、様々な病気が多発しています。そして染体色に異常が出ている人々が激増しているため、今後何世代にもわたっての遺伝的影響にも大きな不安が起きているということです。病気の子供たちの急増に国内の医療設備が絶対的に不足し、満足な治療さえ受けられずに死を待つのみの子供たちが沢山いるということです。

私は以前から、明日の日本の姿であるこのソ連の現状を自分の目で確かめ、心のフィルムに焼き付けて来ることで、私達が原発を認めるといふことの意味を自分自身のなかでもう一度問い直してみる必要がどうしてもあると思っていました。チェルノブイリ支援運動・九州という市民組織が、以前から放射能測定器や粉ミルク、絵本その他の支援物資を送り、チェルノブイリ被災者達との連帯を続けていましたが、今後の医療援助の方向を探り現地の人々との交流を深めるために、この6月に医師を含む医療調査団を派遣するという話が決まりました。大分からも一人出すことになり、願ってもない機会ですので私が行くことになりました。

相当量の被爆を覚悟しなければなりませんし、不治の病に苦しむ子供たちを目の前にすることになる訳で、とても辛い旅になるでしょうが、私にとって、今後原発と真正面から向き合っていくためには、避けて通れない関門だと思われてなりません。この旅が、これらからの私の生き方の厳しい踏み絵になることでしょう。

チェルノブイリに思いを馳せる日に

たみや けいこ

チェルノブイリ原発事故から5年、そして、私が原発問題に取り組むようになって、3年が過ぎました。私が原発を止めなければと思うようになったのは、始めはそれこそ、子どもたちの健康と命を守りたいということでした。チェルノブイリの放射能汚染食品の問題は、農薬や添加物のない食品を求めて生協の共同購入を始めた私にとって、逃げようのない現実として迫るものがありました。それにも増して私を不安にさせたのは、自分の住んでいる日本に当時、40基近くに及ぶ原発がひしめき、それらが、いつチェルノブイリのような大事故を起こすかわからないという状況そのものだったのです。

自分なりに今まで、原発について学習を重ね、様々な反原発の行動にも参加してきました。そのうちに、原発の問題は決して、原発だけの問題に終わらないことを知りました。不経済で安全性にも問題だらけで、しかも、どこまでいっても巨大な核廃棄物を生み出し続ける原発は、さらに差別の問題まで抱えていて、これでなんで推進する人間がいるのかわからないくらいのしろものなのだけど、これこそが、現代社会の抱える問題の縮図なのですよね。それに気づいた時、私はすでに原発だけをなくせばいいなんて、思

っていませんでしたが…。

そして、本当に予想以上に深刻なチェルノブイリの状況を知り、支援活動にも関わり始めました。特に、おとなたちは、自分たちで原発を選択したのですから、そのために被害にあうことは仕方ないと、私はあえて言いたい。けれども、子どもたちはそうではありません。誤った選択をしたおとなたちの哀れな犠牲者なのです。

チェルノブイリの子どもたちの親は、自分の子どもたちが病気で苦しんでいるのを見て、とてもつらいはずなのに、「だから、原発はもう、いらぬ」とは、ならない人が結構いるというのが、悲しいけれども現実です。日本でも原発現地の人たちが、「事故は怖いけど、原発がないと生きていけないから。」というのを何度も聞きましたが、いくらなんでもチェルノブイリのあの現実の中で同じ言葉が吐かれるのがどうしても、私の納得のいかないことの一つです。

チェルノブイリ現地の人たちは、自分たちがどういう中に生きているのか、いったいどの程度知らされているのでしょうか。新聞やテレビ、雑誌に出てくるたくさんの病気で苦しむ子どもたちは、どうしているのでしょうか。「ものがない」と、いくら聞かされても、この豊かな日本の中で、どうしても理解しきれないでいる私。

ちょっとくらい覗いてみたって何もわかりはしないさ、とも思うけれど、やはり、自分のこの目で確かめてみたい。わからなくても、この耳で聞いてみたい。この肌で感じる限りのことでもいいから知りたい。私は、もう、自分がチェルノブ

イリに行ってみるしかないと思っている。それは、原発を知って、再び社会に目を向けさせられた私のこれからの生き方をそれこそ決定的なものにするかもしれない。チェルノブイリ原発事故から5年目の今、私は自ら危険な旅に思いを馳せる。

広河隆一講演会

チェルノブイリはいま

5月8日午後6時より、北九州市立商工貿易会館にフォト・ジャーナリストの広河隆一さんをお迎えして、事故から丸5年が過ぎたチェルノブイリの現状についてお話をうかがいました。

広河さんはフォト・ジャーナリストとして、89年3月、90年7月、そして今年91年2月とこれまで3回にわたってチェルノブイリを訪れており、その模様は『デイズ・ジャパン』『03』などの雑誌にその都度掲載されましたが、特に昨年7月訪問時の様子は『核の大地』（講談社）という写真集に詳しく紹介されています。また、これまで訪問して明らかになった事柄を時を追って説明した本が、『チェルノブイリ報告』という題でこの4月に岩波新書から出ています。

(3日間に4回の講演、この日は昼に福岡、夜に北九州というとんでもないハードスケジュールでした。広河さんは疲労

困憊の御様子でした。お忙しい中を本当にありがとうございました。)

一. 「核の問題」

話を始めるにあたって、まず広河さんが強調したのは、「これは核の問題である」ということでした。ソ連という特殊な「社会主義」国の「未熟な技術」による単なる「原発事故」というのではなく、これは「核一般」の問題なのだ、という視点から広河さんの話は始まります。

ウラルの核惨事、ウインズケール（現セラフィールド）の核廃棄物処理、ネバダの核実験場、インディアン「居留区」における核採掘……。どれをとっても、核を推進する人たちには、共通する事項があります。それは「隠す」ということです。この人たちは、とにかく隠そうとする。事故があったことが知られて、核政策の推進に支障を来すといけなないので、とにかく事故を隠そうとする。

たとえば、1957年のウラルの核惨事の時、アメリカはこうした核の爆発事故が起こったことを知っていました。偵察衛星でずっと監視していたのです。ところが、CIAのレポートからそうした内容はすべて削除された。イギリスも何が起こったか知っていたけれども、これを隠した。なぜなら、ここで起こった事故を公表してしまうと、アメリカの核行政、イギリスの核行政に支障が起こるからです。そうした形で、世界中がソ連の秘密を助けてきたのです。

こうして事故は隠される。「事故なんかなかった、安全だ」というわけです。その結果、どういうことが起こるか？。

事故が起こったことが明らかになったときには、すでに莫大な被害を受けた後だったということになってしまう。どこから手をつけたらいいのかわからないほど、被害が拡大してしまったという事態になるわけです。いや、逆に言えば、チェルノブイリの場合は、そんな事態にたち至ったためにどうしようもなくなって、事故を公表し、世界の支援を求め始めたといっているかも知れません。

こんな状況になっても、核推進論者たちはまだ「大したことはない。被害はほとんどない」などと、本当に腹の立つことを平気で言います。ソ連だけが、秘密行政だとかそういうことではない。核の問題に関しては、日本も含めて、世界中が利害をほとんど一致すると思った方がいい。だからある種の科学者たち・医者たちが、ソ連の科学者たち・医者たちのいうことと言葉尻を合わせて、大した被害はないといっているときには、利害を一致しているような人たちの発言と考えた方がいいかも知れない、と広河さんはいいます。

二. 線引きの問題

たとえば、30キロゾーンもそうですが、30キロ圏内が危険だってことは、30キロゾーンを1メートルでも出たところは安全だと宣言したことにもなったわけです。こういうふう境界を決めて、ここから内側は危険だけど、ここからは安全だと決めたことが、今回の被害をものすごいものにしていくひとつの原因になったんじゃないか、と広河さんはいいます。実際に安全だってされたところは、

決して安全じゃなかったわけですから。

汚染地図についても同じことがいえて、色分けされて、色のついているところは危険だとされているけれども、じゃ、色がついていないところは安全なのか？

汚染地図を描いたとき、それは汚染でない地域を限定したことにもなったのです。たとえば、大都市キエフの汚染の平均値は0.8キュリーで、1キュリーより0.2キュリー低いだけで、汚染地図内での色分けを免れています。キエフにだって、1500キュリー以上のホット・スポットがいっぱいあるそうです。また、大都市がぎりぎりのところで汚染地域から外れている場合が多いんだけれども、これは政策的なもののような感じがする、という広河さんのお話でした。

三. チェルノブイリの状況

さて、チェルノブイリ被災地の状況なのですが、これはやはり想像以上です。どう想像しても、現実に追いつくのは難しい。実際に見ないとわからないかも知れない。子供たちにガンと白血病が現れはじめており、悲しい推測ですが（そうでないことを切に望みますが）これはおそらく拡大していくでしょう。甲状腺異常と免疫不全も、これまで伝えられてきた通り、顕発しているようです。さらに、出産時のお母さんに出血多量が見られることなどがあるという話です。

病気の子供たちの様子については、広河さんの講演の報告集を作る予定ですので、そちらをご覧になって下さい。私（反町）の要約より、広河さんの生の言葉

を聞いていただきたいと思います。

医療支援が緊急に必要とされています。

四. 医療調査団のあり方

……どこで何を見てくるか？

政府の息のかかったところで、いくら話を聞いてもムダということでした。地方の診療所とか、ほんとに一生懸命頑張っているお医者さんを訪ね、そうした病院では何が必要かというリストを作り、長期的に支援を続ける態勢を作って欲しいとのことでした。

また、キエフには、グリーンピースという世界的な団体が自前で病院を作ってしまった、この4月か、5月からスタートしているはずだということです。そうしたところは、何が必要かということをおかかってやっているから、訪問してみる価値があるだろうとのことでした。

医療調査団の派遣の前に、本当にタイムリーなお話を聞くことができました。同行する医師の伊勢さんほか、調査団のメンバーには、何が必要とされているのか、われわれに何ができるのか、われわれは何をすべきなのか、たいへんでしょうが見極めてきて欲しいと思います。

（反町）



4・26アピール 日本の皆様へ!

すべての日本の人々へ

一九八六年四月二六日、チェルノブイリ原子力発電所の事故は世界を衝撃させました。ロシア・白ロシア・ウクライナの広範な地域に死の放射能が広がりました。東スラブ文明の歴史的な中心地を放射能の霧が襲ったのです。

現在、白血病により汚染地域に住んでいる子供も大人も悩まされて死んでいます。この春、遺伝学博士のデータによりますと、われわれの住むジトミール州の昨年の全ての出産の半分は異常でした。ジトミール州の166の居住区に住んではいけない命令が出されているのに人々が住み続けています。移住用の資金を持っていないからです。チェルノブイリ原子力発電所事故の対策手段の国家プログラムは不十分とみなして、汚染地域から人々をきれいな所へ移住させるのを第一の目標であると考えて、ジトミール市のジャーナリストたちは、民間移住基金を創立しました。この基金はすでに一年半活動し、その間子供の多い6家族が移住でき、多くの病院や子供の施設、幼稚園などに援助を与えました。移住基金のす

べての仕事を、独立週刊紙、ジトミールピースニックが担当しています。

あなた方の国からもこの移住基金は大きな救援をいただいています。中部地方、宮崎市、九州等の救援グループの我々の日本の友達が救援物資を集め、ウクライナへ送るという非常に大きな仕事をしています。

すでに非常にきれいな食料品や薬が届いています。けれども心の支援も同じように重要です。あなた方からの手紙やクリスマスカードは私たちの国の人々にとって大変重大な意味をもっています。そして、ウクライナと日本の母親たちの文通キャンペーンも、両国の民間レベルの交流として重要な意味を持っています。

私たちはウクライナや日本の人々がお互いによく理解しあえることを期待しています。

チェルノブイリ被害者への救援の積極的な活動に参加される日本のすべての人々に深く感謝いたします。私たちは一緒に力を合わせて、ヒロシマ・ナガサキを二度と繰り返さないよう、またチェルノブイリのような事故が二度とおきないようにできるだけのことをしましょう。

一九九一年四月一日

ジトミールスキーピースニック
週刊紙編集部

